

# 生活による・生活のための・ 生活の教育

オバマがアメリカ大統領選に勝利しました。有色人として初の大統領の誕生です。リンカーンが奴隷解放を唱えて以来、根深い人種差別と人種間対立に苦しんできたアメリカが、また新しい歴史の一步を踏み出します。リンカーンと言えば「人民の、人民による、人民のための政治」という言葉を思い出します。今日の園だよりの表題は「生活による・生活のための・生活の教育」としました。リンカーンの言葉ととてもよく似ていますが、順序が違います。"of the people, by the people, for the people"のじゅんでなく、by for ofの順番です。この言葉は生活中心教育という考え方表現する言葉として生み出されたものです。生活中心教育という考え方は、戦後の知的障害児教育から生まれたものです。そして筆者もこの考え方に賛同するものであり、愛隣幼稚園の教育(保育)も、この考え方の具体的な実践として行ってきました。

「生活による」とは教育の方法を述べています。教育を紙の上や机の上で行うのではなく、実際の生活を通して行うということです。文部科学省が定めている幼稚園教育要領は、幼児教育を環境を通して行う教育だと説明しています。ここでいう「環境」は「生活」と言い換えたほうがわかりやすいと筆者は考えています。さらに幼児期の子どもの生活は、あそびを中心にした生活です。同じく幼稚園教育要領が、幼児教育はあそびを中心に行うことを基本とすると述べている通りです。つまり「生活による教育」とはあそびを中心にした幼児ならではの充実した生活によって子どもが豊かに育つということを指している言葉です。

「生活のための」とは教育が目指すものを述べています。教育とは、入学試験を突破しい有名大学に入るための手段ではありません。文部科学省は「学力とは豊かに生き抜く力だ」と言っています。その通りです。真の学力とは、「人が自分の力を発揮して生き生きと生きることを実現させる力」だと言えます。教育はそのように生きることのできる人をつくることを目指して行うものです。「生活のための」教育をすることは、そのような意味のことです。そのためには、今がそうでなくてはなりません。今を生き生きと自分らしく生きること、それを積み重ねていくことで、生き生きと自分らしく生きる将来につなげていくのです。だから、子どもの出来ないことを取り上げて将来のために訓練するのではなく、子どもが今できることを大切に、それによって一人ひとりがその子ならではの力を発揮できるようにすることが大切なのです。

「生活の」とは子どもの幼稚園生活(学校生活)の在り方を述べています。子どもの育ちは幼稚園生活全体で実現されるものです。子どもたちが豊かに育つ園生活においては、主体者は子どもです。やらされる人でなく、自分から進んで取り組んで思いを実現し、同じく主体者である仲間と共同してより大きな満足を味わうのです。教師もまた子どもたちと共にこの園生活を作り上げ、その醍醐味を味わうのですから、子どもと共同の生活者です。愛隣幼稚園の「子どもが主人公」という言葉はこうしたことを意味するものなのです。「生活による・生活のための・生活の教育」が目指す園生活とは、「子どもによる・子どものための・子どもの生活」だと言うことができます。

愛隣幼稚園の保育のバックボーンをなしているものの第1はキリスト教の精神であり、第2の支柱は生活中心教育なのです。

08 年度

# 冬休みの園だより

愛隣幼稚園

## 「教育は信仰」？

「教育は育つものに対する信仰である。信仰はいかなるときにも世界を明るくし、励まし、活気づける。わたしたちがこの今日、子どもらと共に笑い、歌い、喜び得るのも、この信仰が与える光明によってである。」

上に掲げた言葉は、日本の幼児教育の先駆者倉橋惣三が、「育ての心」という著書の序文に書いた一節です。実に含蓄のある言葉です。一生のうち一度でいいから、こんな言葉を自分の言葉として語れたらと憧れます。しかも、倉橋がこの文章を書いたのは、昭和20年10月のことです。昭和20年8月15日は日本が戦争に負けた日です。これまでの日本という国が砕かれた日です。すべての人が自信を失い、失意の中に沈んだ日です。それから2カ月しか経たないとき、倉橋はこの文章を書きました。東京に住む多くの人が、焼け野が原のバラック小屋で冬を迎えようとしていたのです。文中にある「この今日」とはそのような今日なのです。このことを合わせて考えると、心が震える思いすらします。

さて、信仰とは何でしょうか。聖書の中には「信仰とは望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」という言葉があります。つまり信仰というのは、見たり触ったりして確かめたりして納得するものでないし、あらかじめの保障や説明がつくことでもないということです。それでも存在することを確認し、希望の実現を確認することができる、それが信仰なのだということです。だから信仰は世界を明るくし、励まし、活気づけてくれるのです。

子がより良く育ってほしいと、親も教師も願っています。けれども現実には親も教師も思うようにならない事態に出会うことがたくさんあります。子どもにとって貴重なチャンスを与えそなってしまうこともあります。大人のせいで子どもを苦しめてしまうことだってあるのです。そんなとき親も教師もがっかりします。あるいはいらだちます。けれども倉橋がこの文章を書いたときのことを考えてみてください。日本のすべての親がそのような状態だったと思うのです。子どもたちのために取り返しのつかない失敗をしてしまった。また、子どもたちが育つために良いものを整えてあげる見直しなどまったくない。子どもたちを目の前にし、親はそう思っていたことでしょうか。けれども、それでもその只中にいて、倉橋は子どもの育ちを信じて希望の光の中にいたのです。

倉橋はこの序文の冒頭で次のように書いています。

「国敗れて、いちばん気の毒なのは子どもである。いちばん希望をもたせるのも子どもである。すまんねといった心苦しさと、たのみますよといった頼もしさと、それが一つにこみあげてくる心もちで、じっと見まもりもし、抱きあげたくもなる。」

倉橋の心には「こんなことにしちゃってごめんね」があります。でもそれと同時に「きっと君はこんな中からもよいものを得てくれる」と信じるものもあるのです。だから倉橋は子どもと共に笑い、歌い、喜びのです。親がすべての失敗を背負い込んではいけません。それは逆に、子どもの育ちを自分の功績だと思うことに陥りやすいものです。それは子どもに対する傲慢につながります。子どもの育ちは、親や教師が何をしたか、何をしなかったかによってだけ決まるものではありません。もっと大きな力があって、それが子どもを育てるのです。その大きな力に委ねる思いが大切です。そのようにするとき、私たちは子どもに対して謙遜になることができます。また、どんなに思ってしまうにいかない羽目に陥ったときにも、明るさと元気と希望を持ち続けることができるのです。